

二〇二三年度入学試験 A-I

# 京都先端科学大学附属中学校

## 国語

### 注意

- 問題は全部で十三ページあります。
- 「試験開始」の合図があるまで問題を開いてはいけません。
- 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
- 質問がある場合は、静かに手をあげ、教員が来るのを待ってください。
- 「試験終了」の合図があったらすみやかに解答をやめ、以後は教員の指示にしたがってください。

□ 次の1～4の語の中で否定語にしたとき、他のものと異なるものを選び、記号で答えなさい。

- |   |   |    |   |    |   |   |   |   |
|---|---|----|---|----|---|---|---|---|
| 1 | ア | 自然 | イ | 完成 | ウ | 服 | エ | 正 |
| 2 | ア | 公式 | イ | 合法 | ウ | 言 | エ | 行 |
| 3 | ア | 関係 | イ | 意識 | ウ | 通 | エ | 害 |
| 4 | ア | 解決 | イ | 成年 | ウ | 断 | エ | 熟 |

□ 次の1～4の□をうめて、文を完成させなさい。□にはひらがなが一文字ずつ入ります。

- |   |                  |
|---|------------------|
| 1 | もし雨が降れ□、大会は延期です。 |
| 2 | 色はきれい□□、形は悪い。    |
| 3 | 奇跡は起こる□、信じている。   |
| 4 | 立った□□、ご飯を食べる。    |

③ 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。作問の都合上本文を変えたところがあります。

どうすれば仕事と遊びの精神を一体化させることができるのか？

まずは「仕事⇨労働」とは考えないこと。仕事とは、自分が食べていくためだけのものではない。自分が世界といかにかかわるか、世界のなかに自分をいかに位置づけるかということでもあるからです。

新世代の君たちにとってほしいのは「誰かのために働くことを仕事にする」ことです。働くことはたしかにつらい。ただ働くことが嫌で仕方がなければ、そこによるこびや、やりがいを見出すことは難しい、でも、それを誰かがよろこんでくれる、誰かが必要としてくれるということがわかれば、そこにやりがいや生きがいを感じられるはずです。

そのためには、自分が好きなこと、楽しいことを仕事にしようとは考えない方がいい。やらない方がいいというわけではありませんが、とりあえずはあとまわしにしておく。大事なことは、いま、自分の眼のまえにあることを、とにかく必死でやる。それに尽きます。

そうして自分の価値を、自分がいま立っている場所、自分がいま置かれている状況から高めていく努力をする。これが、世界のなかに自分の存在する位置をみつけることにつながるのです。

そうすれば、きつと誰かが認めてくれるときがきます。「がんばってるね」でも「いい仕事してるね」でも「じゃあ、こんなことやれる？」でも、何でもいい。誰かに必要とされるということは、いいかえれば、世界のなかに自分の価値があるということです。時間はかかるかもしれませんが、ぼくは、ほんとうにそれを実感できるときまで、二〇年以上かかりました。でも、そのときは必ずやってきます。

そして、ここが「遊び」の精神の大事なところで、とにかく眼のまえのものを、何でも遊びに変えてしまおうくらいの気持ちと、<sup>1</sup>シテン、すなわち「心の<sup>2</sup>遊び」をもちつづけ、誠実に懸命にひとつひとつに臨んでいく。それさえできれば、つらからうが苦しからうが何とかかなります。仕事は楽なわけはありません。でも、つらい仕事だからこそ、やり遂げたときに達成感やよろこびが得られることも大きい。ゲームでゴールしたときの達成感と同じです。

A 日程 [A I]

もし、自分にできることが自分の好きなことであれば、それはとても幸運なことです。「A」  
昔からいわれるように、人は好きなことの方が、嫌いなことよりもはるかにうまくでき、さらには、好きな  
ことをしている方が、人に多くのよろこびを与えられるようです。

ところが、自分が好きでもないのでなぜかうまくできてしまう。これもすばらしい才能です。きっとそれ  
が天命なのかもしれないと信じて、とにかくやってみる。

自分ができることで、人がよろこんでくれることは何か。それを考えて、ひとつひとつ実践していく。人  
のよろこぶ姿を自分の生きがいにすることができればしめたものです。君は、それだけで生きていくこと  
ができます。

ぼくはいま、よりよい社会をつくるために文化や芸術に何ができるのかを考え、実践することが自分の  
やるべきことだと信じて仕事をしています。

それが、結果的に本を書いたり、劇場の運営に携わったり、アーティストの企画を考えたり、<sup>2</sup>ジ  
イからの依頼を受けてまちの文化事業を計画したり、ホールの舞台で文化・芸術のナビゲートをしたり、  
文化・芸術講座をやったり、若い文化人を育成したり、といったことにつながっています。いろいろなことを  
やっていますが、<sup>3</sup>目的はひとつです。

このようなぼくをみて、あなたには才能があるからそれができるのだと、もし誰かがいったとすれば「と  
んでもない！」と強く否定できる自信があります。なぜなら、ぼくのまわりには、とんでもない才能を持っ  
た人たちがほんとうにたくさんいて、そのような才能あふれるアーティストたちと一緒に仕事をしなが  
ら、才能があるとはこういうことなのだと言っながら仕事をしているからです。

ぼくには、学歴も人脈も、特別な才能も何もありません。組織に属さず、自分を守ってくれる肩書きも  
ない生き方をしようとすれば、ひとつのことだけをしてはいられない。もし傑出した才能がひとつあれ  
ば、それだけで生きていけますが、特別な才能がなければ、できることを増やしていくしかない。そのよう  
にして、ぼくは自分にできて、なおかつ人によらなくてももらえることをひとつ、またひとつ増やしてい  
きました。

ぼくはいま、固定されない六つか七つの職種をもっていますが、いくつもの仕事を同時にこなせなければ生きていけないという考えは、ヨーロッパ時代に、異国の地でさまざまな差別や屈辱を味わい、失敗と挫折のなかから身につけたものです。

もし、ひとつのことしかできなければ、うまくできてもせいぜい一〇人にひとりくらい存在にしかたない。それが、二つ、三つと増えてくれば、一桁ずつ増えてくる。これがぼくの経験による実感です。つまり、二つで一〇〇人、三つで一〇〇〇人、四つで一万人というぐあいに、職種が五つくらいあれば、一〇万人に一人くらいの存在にはなれる。そうして世界における自分の存在価値を高めていけば、いつのまにかそれが自分をつくってくれます。

「大学を卒業したら就職しなければならぬ」「会社を辞めたら生活できない」

もし、この「常識」が社会から消えてなくなったら、日本はもっと自由な国になれるはず。この世は、誰もが信じて疑わない「常識」に張り巡らされています。このふたつの「常識」も、とても強い「思い込み」となって君たちを縛っています。

「就職すること」や「会社に入ること」を否定するわけではありません。組織に属するのはいいが、組織に縛られることはないといいたいのです。また「就職しなければ生きていけない」という常識に縛られてはいけないということです。

リベラルアーツの精神から学ぶべきことは、このような「思い込み」から **B** になるということです。人生とは試練でもあり、遊びでもある。だから仕事についても「自分にできること」「自分がやりたいこと」を、人がよるこんでくれるという **キジューン** から、じっくり立ち止まって考えてみればいいのです。

仕事がつらくてどうしようもない。もしこう思うなら、仕事を消してしまえばいい。

仕事とは「仕える事」と書きます。君はいま、何に「仕え」ているのでしょうか？ 何かに、もしくは誰かに仕えている以上、それは奴隷であることと変わらない。そんな「仕事」は消してしまえばいい。君たちは断固として自分に仕えるべきです。

「<sup>4</sup> 自分に仕える」とは、自分を中心に考えると、わがままに振る舞うことではない。それは、こま

で読んでくれた君たちにはよくわかるはずです。「自分に仕える」とは、自分を律すること。そして、誰かのせいにしたたり、何かを恨んだりすることに寄りかかるような「仕える事」は、君の人生から消してしまうことです。

何よりも大切なことは、君たちがどのような肩書きを持つ人間になるか、ということではない。君たちひとりひとりが、自分にしかできない人生を生きているということです。

若い頃は、ぼくにも「こんな人になりたい!」と強く憧れた人が何人もいました。けれども、なりたいた願った人には誰ひとり近づくことすらできなかった。その代わりに、ほかの誰でもない自分になれた。いまでは、そう思っています。

(浦久俊彦 『リベラルアーツ 「遊び」を極めて賢者になる』)

\*傑出：飛びぬけてすぐれていること。

問一 〰〰部 丨丨3のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 丨部 丨「そのとき」とありますが、それはどんな「とき」ですか。「丨とき」に続く形で二十字以内で説明しなさい。

問三 丨部 2「遊び」とありますが、同じ意味で使っているものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 安心    イ 工夫    ウ 余白    エ 自由

問四 A に入るものとしてふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 失敗は成功のもと
- イ 好きこそものの上手なれ
- ウ 下手の横好き
- エ 石の上にも三年

問五 — 部 3 「目的はひとつです」とありますが、その「目的」とはどんなことですか。「く」と」に続く形で三十五字以内で本文中からぬき出しなさい。

問六 B に入る言葉としてふさわしいものを本文中から漢字二字でぬき出しなさい。

問七 — 部 4 「自分に仕える」とありますが、筆者はどのようなことだと考えていますか。二十五字以内で説明しなさい。

A 日程 [A I]

四 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

\*カーポートに車が入ってくる音が外から聞こえてきたので、わたしは、いそいでレオンの骨つばをもとにもどした。

お母さんだ。

「ただいま。美咲、いたのね」

エコバッグをぶらさげたお母さんが、わたしのいるリビングへ入ってくる。

「今日は遅番<sup>おそばん</sup>のひとに用事があったから、お母さん、ちょっとだけ残業してたの」

お母さんは、ここから車で十分くらいの距離にあるショッピングモールのスーパーでパートをしている。仕事の内容は、おもにレジでのセツキヤク<sup>せつきやく</sup>だけど、その日によって食品コーナーにいたり、洗剤<sup>せんざい</sup>などの生活<sup>2</sup> 雑貨<sup>ざつか</sup>をあつかうコーナーにいたりする。

お母さんは、わたしを一瞬<sup>いっしゆん</sup>ちらりと見て、そのままキッチンへ行った。

スーパーで買ってきた食材を冷蔵庫に入れながら、「今日は肉じゃがだね。ほとんど同じ材料でカレーもできるけど、最近、翔は、カレーは、うんとからいほうがいいって言うから、甘口<sup>あまぐち</sup>のとふたつするのはめんどくさいし」と、ぶつぶつしゃべっている。……わたしに言っているのだろうか。それとも、ひとりごと？ お母さんは、買い物から帰ってくると、よくこんなふうになにかを言いながら買ってきたものをしまっている。

うちでは、お父さんとおにいちゃんからはからいカレーが好きで、お母さんとわたしは甘口が好きだ。

「よし、よし」

お母さんが冷蔵庫をパタンと閉めた。

わたしは、お母さんがもどってくるのと入れかわるように、そそくさとリビングを出た。そして、階段を上って、二階の自分の部屋へ行く。

「美咲、美咲」



閉めたドアの向こうからお母さんの声がした。

「……やっぱり、ばれていたんだな。」

わたしは、そっとドアを開けた。

「またレオンの骨つぼを開けて、なかを見ていたの？」

お母さんが言ったので、わたしは、だまってうなずいた。

「そう。べつにいいけどね。ふたが、きちんと閉まってなかったから。ほんとうなら、湿し気けが入らないように、ふたをテープでとめたほうがいいらしいの。湿気があると、どうなるか、美咲もわかるでしょ。カビがはえてきたり」

わたしは、ぶんぶんと首を左右にふった。

いやだ。

レオンの、たいせつな骨にカビだなんて。

「美咲」

お母さんがわたしを呼ぶ。だけど、わたしは、話のつづきは聞きたくないというふうに、ひたすら首を左右にふっていた。

カビなんてはえないよ。

だって、あれは骨だけど、レオンなんだよ。

そんな、Aみたいに言わないでよ。

わたしの心のなかで、言いたいことがぐるぐるまわる。

だけど、それらはぜんぶ外に出ないまま、ただ、わたしのなかに雪みたいに降り積もって、やがて消えていってしまう。

「美咲……。そろそろレオンを土にかえしてあげようよ」

お母さんが言った。

目には見えない自分の心が、一気に重くなっていく。

——レオンを土にかえしてあげよう。

何度この言葉を聞いただろう。

レオンの骨は、リビングにある。

室内犬だったレオンの、ケージがあったところに三段のカラーボックスを置いて、そこに骨つばや、レオンの写真、好きだったおもちゃが置いてあるのだ。

今年のお正月をむかえたときだった。

レオンがいない、はじめてのお正月。

家族みんなでおせちとピザを食べていた。

「もうすぐ十か月がたつのかあ」

お父さんがレオンのいた場所にあるカラーボックスをながめながら、言った。

「そろそろ、レオンのことを庭にうめようか」

えっ。

<sup>2</sup> わたしは、食べようとしていたピザを落としそうになった。

「レオンのお墓をつくるってこと？」

おにいちゃんが言って、お父さんは「そうだ」とこたえた。

「庭の、びわの木があるあたりがいいんじゃないか」

「そうね。レオンは、庭を走りまわるのが大好きだったし」

お父さんとお母さんが言った。

それから、お父さんとお母さんは、自分たちが今まで飼った犬の話をしはじめた。

お正月だから特別、と言ってふたりともいつもは夜にしか飲まないワインを飲みながら話していた。

お父さんもお母さんも、ずっと犬がいる家で育った。結婚する前、まだおたがいの存在さえ知らない、子どもときからだ。

お父さんは、今まで四匹しひきの犬とくらした。

お母さんは、六匹だ。小さな犬が、同時に三匹も家にいることもあったという。

お父さんとお母さんは、よくケンカをする。だけど、共通点もあって、そのひとつが「犬が大好きで、ずっと犬とくらししている」ということだった。

「生きてきて、家に犬がいない期間がこんなに長いのは、はじめてだな」

お父さんが言って、「そうね、私もそうだよ」とお母さんがうなずいた。

レオンは、お父さんとお母さんが結婚して、すぐに飼いはじめた犬だった。

「キャバリア・キング・チャールズ・スパニエル」というのが、レオンの犬種だ。

「キングだなんて、すごいじゃないか。犬だけど、ライオン・キングだな。そうだ、名前はライオンからとって、レオ。レオンにしよう」

お父さんは、レオンの名前をつけたとき、こんなことを言っていたらしい。

そして、レオンが来てから、まもなく、お母さんのおなかにおにいちゃんができる。

「こんなにはやく子どもができるなんて、うれしいわ。きっとレオンができてくれたのね。だけど、うちの、斎藤家のいちばんのおにいちゃんはレオンよ。生まれてくる子となかよくしてね」

お母さんの言いつけを、レオンはちゃんと守った。

レオンは、いつだって、おにいちゃんとわたしの ミカタ でいてくれたから。犬だから、言葉をしゃべることはできないけれど、レオンのまなざしは、やさしくたよりのあるおにいちゃんという感じで、そばにいと、わたしは「レオンに守られている」という安心感でいっぱいだった。

いつだって、そばにいたレオン。

いるのがあたりまえだったレオン。

もう、いない。

そして、お父さんとお母さんは、レオンの骨を庭にうめて、お墓をつくるという話をしている。

そのうえ、おそれていたことが起きようとしていた。

「やっぱり、家に犬がいないのはさみしいな。なんだか物足りない」

お父さんが言った。

その瞬間、ふわりと、その場の空気に色がついたような気がした。オレンジとか、そういう明るい色。だけど、それは目には見えない。そういう気がした、というだけだ。

そして、その色を発しているのは、おにいちゃんだった。

おにいちゃんは、お父さんがほんとうに言いたいことを瞬時に理解していたのだ。

おにいちゃんは、心のなかでこう言っている。

——「新しい犬、飼ってもいいの？ おれ、はやく犬が欲しいよ」

それはお父さんも同じで、新しい犬が欲しいのだ。

お母さんも「そうだね、そろそろ……」と言って、わたしのほうを見た。

お母さんと目があう。

わたしは、だまったまま、首を横にふっていた。

3 さっきまで空気についていた見えないオレンジ色が、黒い絵の具をたらしたみたいに灰色になっていく。見えない絵の具をたらした犯人は、わたし。

お父さんとお母さんは、なにも言わなかったけれど、がっかりしているのはすぐにわかった。

わたしは、お父さんとお母さんがっかりさせてしまった自分もいやだったけれど、レオンの骨とさようならしてお墓をつくることも、いやだった。

お父さんとお母さんが新しい犬を飼いたいと思っていることも、いやだった。

「美咲、お墓をつくらないとレオンが成仏できないだろ？ 犬の妖怪になっちゃうかもしれないぞ」

こんなことを言うおにいちゃんも、いやだった。

いや、いや、いやだらけ。

それが、今年のお正月の出来事。

ほんとうは、知っているんだ。

お母さんが、わたしがレオンの骨つばを開けて、なかの骨を見たり、さわったりしていることをよく思っ

ていないことを。

レオンの骨を土にかえしてあげよう。

お母さんがなにかにつけてそう言うたび、わたしはそれを強くこぼんでいる。

ママ友と電話をしているのを、ぐうぜん耳にしてしまったことがあって、そのとき、お母さんは「死後の世界にあこがれているとか、そういうんじゃないといいんだけど」と話していた。さらに「あの子は、小さいころから、おとなしくて、なにを考えてるかわからないから、よけいに、ちよつとね」とも。

だが、とは言っていなかったけれど、なんとなく、わたしのことだなと思った。

お母さんは、わたしのことを心配しているんだ。

だけど、お墓も、お母さんの心配も、ぜんぶいららないんだよ。

わたしは、ただ、レオンにまた会いたい。

一瞬でもいいんだ。

小さな足で一いっしょうけんめい生懸命地面をけって、走っていたレオンを見たい。

だけど、レオンはいないから、かわりにレオンの骨にさわる。

そうすると、ざわざわしていた心が、だんだんしずかになってくる。

お母さんは、これ以上、話していてもなにも変わらないと思ったのだろう。

「今日のごはんは、白いのじゃなくて、五穀米にしてもいい？」

レオンとは、ぜんぜんちがうことを聞いてきた。

わたしがうなずくと、「じゃあ、そうするね」と言って、お母さんは下へおりていった。

(吉田桃子 『夜明けを連れてくる犬』)

\*カーポート…屋根付き駐車場のこと。

問一 〰〰〰部 1 〰 3 のカタカナを漢字に直し、漢字には読みをひらがなで答えなさい。

問二 — 部 1 「そそくさとリビングを出た」とありますが、その理由を簡潔に説明しなさい。

問三 — 部 2 「わたしは、食べようとしていたピザを落としそうになった」とありますが、そのときの「わたし」の気持ちとしてふさわしくないものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア おどろき      イ いかり      ウ 不安      エ とまどい

問四 A にあてはまる語句を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 色あせた写真      イ 賞味期限の切れた食べ物      ウ 燃料のなくなった自動車  
エ 空気のぬけたボール

問五 — 部 3 「さっきまで空気についていた見えないオレンジ色が、黒い絵の具をたらしたみたいになり、灰色になっていく」とありますが、①「オレンジ色」と②「黒い絵の具」は誰のどのような気持ちをとえていますか。それぞれ答えなさい。

問六 本文に描かれている回想の場面を本文中からぬき出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

〈問題はこれで終わりです〉

受験番号

学校名

小学校

氏名

点線より下には何も記入しないこと。

①

2

3

4

②

2

3

4

③

2

3

3

問二


とき。

問三

問四

問五


こと。

問六

問七


④

問一

1

2

3

問二

問三

問四

問五

②

①

問六

**AI**

# 国語A-I

【一】【計12点】

1 イ 2 ウ 3 ウ 4 ウ

【二】【計8点】

① ば ② だが ③ と ④ まま

【三】【計39点】

問一 1 視点 2 自治体 3 基準 (2点×3)

問二 世界のなかに自分の価値があると実感できる(とき)。(7点)

問三 ウ (4点)

問四 イ (4点)

問五 よりよい社会をつくるために文化や芸術に何ができるのかを考え、実践すること。(6点)

問六 自由 (5点)

問七 自分を律して自分にしかできない人生を生きること。(7点)

【四】【計41点】

問一 1 接客 2 ざっか 3 味方 (2点×3)

問二 レオンの骨つばを開けていたことをお母さんにはれたくなかったから。(7点)

問三 イ (5点)

問四 イ (5点)

問五 ① おにいちゃんの、新しい犬が飼えるという期待。(6点)

② わたし(美咲)の、家族がレオンのことを忘れて次にすんでいこうとすることに對する嫌悪感。(6点)

問六 今年のお年ゝの出来事。(6点)